

ムンバイの違法キャロムクラブの危険な世界へ潜入

デヴィヤーニ・ニゴスカル

掲載日：2021年06月08日 21時19分

全ての視線がクイーンに向けられている。そのクイーンはボードの中央から少しはずれた左サイドに位置して、野心家のターゲットになっている。

イシュタクアクは、ボードから目を逸らすことなく、オレンジ色のストライカーをじっくりとずらし、それをベースラインに置いてから数秒で弾いた。クイーンはボードを滑らかに横切るとネットへ吸い込まれた。

ドングリー^[1]にあるパルヴァーズ・キャロムクラブは、ギャラリーの歓声と拍手に包まれたが、51歳の彼は平然としている。ビディ^[2]に火をつけると、煙の輪を吹きながら、若者に次のゲームを準備するよう合図した。

「まだゲームは始まったばかりだ」と、父親とクラブを経営する21歳のアブドラが笑う。ドングリーの賑やかでいかがわしい路地にあるパルヴァーズ・キャロムクラブの荒廃した緑色の壁には、半分破れた映画のポスターやセピア色の写真が飾られている。店内の4台のキャロムボードを男たちが取り囲むように座り、その上に吊るされたランプだけで照らされている。

※ [訳注:1] ドングリー (Dongri) は、ムンバイのゴライ (Gorai) の北に位置する港湾都市。

※ [訳注:2] ビディ (beedi) とは、インドの巻きタバコのこと。

ほとんどの人にとって、一日が終わろうとしているのに、ドングリーやムンバイ近郊のスラム街の男たちにとっては、その日の楽しみがこれから始まるようとしている。

午後10時、キャロムの時間だ。

長い間、「マキシマム・シティ (最大都市)」には、スラム街と高層ビルが共存し、部外者にまざまざと経済格差の大きさを見せつけてきた。ムンバイは毎年、大量の移民が流入する都市であり、その多くはスラム街のあちこちに積み重なった掘っ立て小屋に住んでいる。

このユニークとも言える都市現象が齎らしたものは数知れないが、その最も魅力的な成果は、ありえないようなサブカルチャーが数多く生まれてきたことにある。

アンダーグラウンド (密かに活動する) のヒップホップ集団、ファイトクラブ、ダラヴィ^[3]中心部にあるボディービルセンター、そして、薄汚れた公共施設の奥深く、薄暗い片隅にある小さなキャロムクラブもそのひとつである。

※ [訳注:3] ダラヴィ (Dharavi) とは、ムンバイにあるアジア最大級のスラム街の名称。

市内のキャロム・クラブの起源について、特定の出来事まで遡ることはできないが、この取材のために私が交流したほとんどの住民たちは、「アングレゾ・カ・ザマナ（イギリス植民地時代）」から始まっているという意見で一致する。それより遙か昔に起こったと主張する人は少数派でしかない。

きっかけは単純で、キャロム愛好家が小さな部屋をレンタルするか購入するかして、2台から4台のボードと吊るしたランプを設置して、それが口コミで広まった。午後の早い時間から、ほとんどのクラブがオープンすると、その時間帯はリタイヤした年配や小学生たちが訪れる。“ホンモノの楽しみ”が始まるのは夕方になってからのこと。午後7時を過ぎると、真剣に試合に取り組む大学生や社会人でいっぱいになる。地元チャンピオンたちは、毎日1時間あたり約20ルピー（約35円）で、次々と試合をする。



パルヴァーズ・キャロムクラブのカマルディーンと息子のアブドラ

「ここへ来る人たちは勤勉だけど、ストレスの解消方法をほとんど持ってない。うちのクラブは安上がりだし、暇つぶしに充分なんだろうね」と、パルヴァーズ・クラブを20年間経営してきたアブドラの父親、カマルディーンは話す。

まるでいかがわしいボリウッド[4]のスリラー映画から抜け出したように、凶悪犯罪の温床となったキャロムクラブの悪評について、彼は卑下するでもなく語る。偶然ではなく、ここが軽犯罪者の勧誘の場となってきたのだ。

ドングリーの裏社会とキャロムクラブとの繋がりについて聞くと、カマルドディーンは苦笑いして、悪名高きダーウッド[5]が、かつてプレイしていたというシャマ・キャロムクラブについて語り始めた。「10本の指を使ってプレイするタイガーと呼ばれた奴がいた。60年代から70年代にかけてのことで、その後、みんな逃亡すると、そのクラブも潰れた。今はそんなトコじゃないから大丈夫だよ」と、私を安心させるように言った。

※ [訳注:4] ボリウッド (Bollywood) とは、ムンバイの映画産業全般につけられた俗称。

※ [訳注:5] ダーウッド・イブラヒム (Dawood Ibrahim) は、インドの組織犯罪グループの主導者。

パルヴァーズがプレイヤーでござった返し始める頃、ほんの数メートル先にあるアーメド・フセインのキャロムクラブで、26歳のタルハはパリッとしたシャツに身を包み、ストライカーを弾こうとしていた。他のプレイヤーたちから「タルハ師匠」と親しみを込めて呼ばれる彼は、親の反対を押し切ってプレイする友人のハシムと一緒に、この10年間、毎日ここでキャロムをプレイしているのだと教えてくれた。

「時間の無駄だと思われようが、それでも僕はここへ来るんだ」と呟く。二人のプレイを、アーメド・フセインの12歳の姪は、熱心に観戦している。「僕らは通常、女と遊ぶことを認めない。だって、こんなに多くの男たちがここへやって来るんだ……。もし誰かがイタズラでもしたらどうすんだよ?」と、逆に質問された。

その回答は、約40キロ離れたマルヴァーニ^[6]にあるようだ。シェイク姉妹のサラ (36) とシャブナム (38) は、キャロムをプレイするだけでなく、エアコンとテレビを備えた自分たちのキャロムクラブをオープンしている。マルヴァーニで育った二人は、虐待する夫と別れ、経済的に自立する手段としてキャロムクラブを開業した。「マルヴァーニは昔からキャロムが盛んだだったので、お金を稼ぐにはうってつけだと考えました。私たちには土地があったし、二人ともゲームが大好きでした。当初は特にこんな男社会のスポーツに参加することを躊躇してたんですが、驚くほど絶大な支持を得ることができたのです」とシャブナムは、ここで午後、女の子たちがプレイするようになった経緯を教えてくれた。

※ [訳注:6] マルヴァーニ (Malvani) は、マハーラーシュトラ州 (Maharashtra) の最南端。



男性優位の中で働く2人の女性、サラとシャブナム

「最初はクラブに入ることさえできなかったのに、徐々に自信がついて、男たちとプレイするようになりました」と、サラは白コイン3個を次々と難なく沈めながら言う。彼女たちのクラブはエアコンがある唯一のクラブで、プレイヤーたちからも絶大なる支持を得ている。

だが間もなく、姉妹の叔父も近所にエアコンを設備したクラブをオープンさせるので、姉妹のライバルとなるだろう。

ジャベド・シェイクのクラブでは、火曜の夜は満席だ。赤と緑の月の旗が飾られ、清潔で涼しいこのクラブへは、梯子のような狭い階段を登らないと入れない。

このクラブの常連客の一人である42歳のビクター・ジョセフは、子供の頃からずっとキャロムをプレイしてきた。現在はドバイに移り住んでいるけど、インドに来たときは必ずシェイクのキャロムクラブを訪れている。

「ドバイにはそういう文化がないんだよ。キャロムクラブは自分の国で一番欲しいもののひとつだね」と、心の底から語る。

親しみやすいキャロムは人を惹きつけ、NRI（在外インド人）[7]ですら、市内のキャロムクラブを訪れる。

マルヴァーニやその他の地域で、キャロムがこれほどまでに人気な理由は他にもある。

キャロムクラブからギャンブル文化が生まれたのか、それともギャンブル文化からキャロムクラブが生まれたのかについては議論の余地がありそうだけど、ゲームに勝った後に札束を交換するハスラー[8]を見ても驚くことではない。

ウスマン・バーイのクラブでは、14歳の子供たちでさえ、50ドルから1000ドル賭けていることを恥ずかし気もなく認める。

ゲームの開始前、現金がウスマン・バーイに渡され、その後、ウスマン・バーイは勝者にそれを渡す。このギャンブル文化は、市内のほとんどのキャロムクラブに浸透している。

「私たちが賭けるのは、冷たい飲み物とファールーダ[9]だけです」と、マルヴァーニ最大で会員制のフィロミーナ・キャロムクラブのオーナーで太鼓腹のママは断言する。それを聞いたプレイヤーたちは大爆笑した。そしてママは、ゲームにちょっとしたスパイスを加えるため、最小限の賭けが行われていることをこっそりと認めた。

ドングリーにあるアーメッドのクラブの人々は、アーメッドの兄が隣りで営む怪しげな店の中華料理を賭けていたので、それは文字通り「スパイス」という意味であった。

※ [訳注:7] NRI (Non-Resident Indians) とは、在外インド人のことで、日本では印僑と呼ぶ。

※ [訳注:8] ハスラー (Hustler) とは、ギャンブルにおいて実力を隠して相手から大金をせしめる詐欺師。

※ [訳注:9] ファールーダ (Falooda) とは、南アジアで人気の冷たくて甘い飲料のこと。



ゲームの開始前、ウスマン・バイに現金を渡すティーンエイジャー

ドングリーでプレイヤーたちが炒麵^[10]の皿を回している頃、パレル^[11]のスコープオン・キャロムクラブでは、4人のチャンピオンたちが互いに競い合い、事態は少々深刻化していた。ディレシュ・ケデカールが弾こうとしている。元世界ランク4位で、4大会のギネス記録保持者であり、シヴ・チャトラパティ賞^[12]を受賞しているディレシュ・ケデカールは、彼が初めてプレイしたスコープオン・キャロムクラブが輩出したチャンピオンなのである。「男女混合ダブルスをしているときに、妻と知り合ったんです」と、ランプの下で輝くキャロム型の指輪を見せてくれた。彼と対戦するのは64歳のヴィラスで、元全米チャンピオンのベテランだ。16歳のニーラジ・タムへと18歳のシダール・ワブワルカルが加わり、彼らはどちらもジュニア・ナショナルチャンピオンで、マハラシュトラ・キャロム協会公認のスコープオンクラブで練習している。それぞれのストライカーが毎手番、キャロメン（コインのこと）を沈めていくので、ほんの数分でゲームは終了した。

※ [訳注:10] 炒麵 (Chowmein) とは、中華麵を使った中華料理で、日本でいうところの焼きそば。

※ [訳注:11] パレル (Para) は、ムンバイの近隣地域。

※ [訳注:12] シヴ・チャトラパティ賞は、マハーラーシュトラ州政府による栄誉のあるスポーツ賞。



ディレシュ・ケデカールの情熱の指輪

その先のちょっと行ったところにある、木の棒と青色のテント布でその場のしぎに作られたライノ・スポーツクラブでは、同じような精神が醸成されている。

ここでは、72歳のネールルカーが、若き代表選手ラーフル・ソランキのプレイを観戦している。ネールルカーは年齢的に現役ではないが、それでもライノ・クラブに毎晩来ては、若者たちを指導している。タタ社[13]の元・技術担当役員だった彼は、幼い頃にこのゲームを始めた。彼にとってキャロムは人生そのものであり、なくてはならないものだ。

ラーフルにテクニックを見せながら、彼は顔を上げると、ムンバイではキャロムのサブカルチャーが、何年経っても変わっていないことを教えてくれた。

ただ、YouTubeの出現によって、若者たちはスキルを学ぶための新しいリソースを手に入れたと彼は述べる。ラーフルは頷くと、ネット動画から学んだテクニックを披露してくれた。

全国制覇を達成して、スポーツクォータ[14]を通じてRBI[15]の面接も受けた。「就職することはできませんでしたが、この国のキャロムには未来があることを実感しました。こんな小さなキャロムクラブでも、恵まれない人々にとても多くのチャンスを与えてくれます。いつか祖国のためにプレイしたいです」と、彼は意欲的に語る。

※ [訳注:13] タタ社 (Tata) は、財閥のひとつであり、単一の財閥としてはインド最大。

※ [訳注:14] スポーツクォータ (Sports Quota) とは、スポーツ選手に与えられる特別推薦制度のこと。

※ [訳注:15] RBIは、インド準備銀行 (Reserve Bank of India) の略称。



パレルのスコープイオンクラブでチャンピオンのゲーム

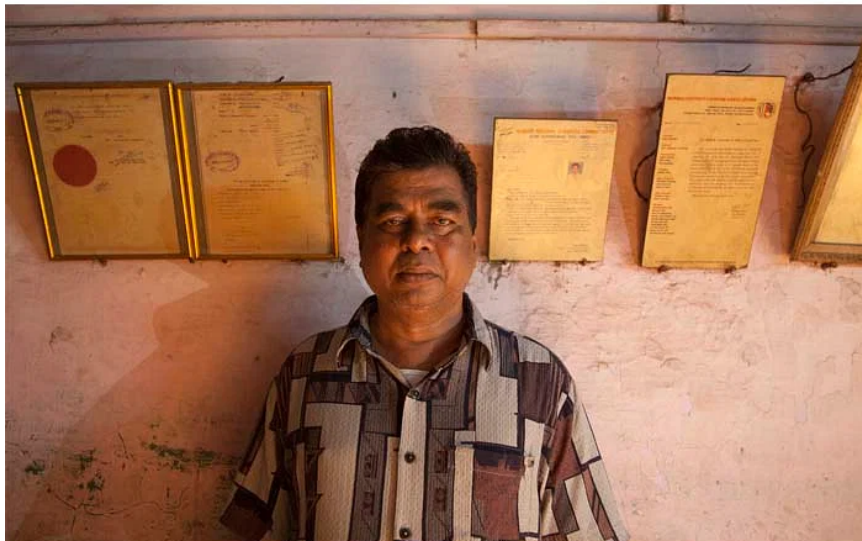
パレルのクラブは、ムンバイのキャロムクラブコミュニティの中でも、ワールドクラスのチャンピオンクラブとして知られている。広々として風通しの良いクラブは、正式登録さ

れていて、スポンサー料を享受することで、地元でトーナメントを開催しているため、他のクラブからも競技に参加する人がやってくる。だが、それだけで他のキャロムクラブのやる気を削ぐわけではない。このクラブがそうであるように、オーナーもまたダイナミックな性格の持ち主だ。彼らはこの地域の「バーイー（兄）」であり「ダダ（父）」であり、違法かどうかにかかわらず、ほとんどの活動を牛耳っている。ウスマン・バーイーもママも、クラブでそれなりの賞金をかけた大会を開催している。

しかし、2010年にハリウッドのアクションドラマ映画『ストライカー』で、マルヴァーニの盛んなキャロム文化を描いたのと同様に、多くのプレイヤーにとって、これらの試合はゲームを超えたものとなり、大会は権力闘争の場と化して、ゲッター^[16]の栄光を宣言する好機となった。

このキャロムクラブは深夜営業の裁判所の許可証を持っているだけでなく、地区のキャロム協会からの証明書や承認書を持っている。

※ [訳注:16] ゲッター (ghetto) とは、大都市におけるマイノリティの密集居住地のこと。



フィロメーナ・キャロムクラブのオーナーであるママは、裁判所の許可書を額に入れて壁に飾っている

キャロムクラブのもうひとつ注目すべき点として、おそらく共同体の責任を負うべき政治家が最初に目標にするべき同胞の絆をムンバイのスラム街で育んでいることである。ハリシュとナディームが共同経営するカー・ダンダ^[17]のオム・サイ・クラブでは、あらゆるカーストや信仰の人々がプレイシに来ているという。「当初はキャロムだけが宗教で、他には何もありませんでした」と、ナディームが言う。その感覚はほぼ全てのクラブで共有されている。

「ここはイスラム教徒の多い地域ですが、市の反対側からヒンドゥー教徒の友人もやってきます」と、ドングリーのアーメド・フセインは言う。

※ [訳注:17] カー・ダンダ (Khar Danda) は、ムンバイのサルセット島にある村。



キャロムがすべての人を団結させる

キャロムクラブは友愛文化を促進する一方で、常に包括性のメッセージを発信している。カフ・パレード[18]のアンベードカル・ナガール・チャウル[19]にあるシャーム・ガイクワッドのキャロムクラブでは、障害者も受け入れている。足でキャロムをする人、指で弾く人、キャロメンをネットの穴に吹き込む人など……、ムンバイのアンダーグラウンドのキャロムクラブには天才的なプレイヤーが揃っている。

※ [訳注:18] カフ・パレード (Cuffe Parade) は、ムンバイのビジネス地区。

※ [訳注:19] アンベードカル・ナガール・チャウル (Ambedkar Nagar Chawl) は、ウツタル・プラデーシュ州にある長屋に似た住宅の一種。

ムンバイの薄暗いキャロムクラブは、経済的にも機会的においても長い間、世代を支え、人跡未踏の文化の一部として、キャロムを通じて絆が深める多種多様な人々からなるコミュニティ全体を形成してきた。ある人にとっては暇つぶしかもしれないが、ある人にとっては情熱そのものだった。いずれにせよ、この街の人々の生活に欠かせないものとなっていた。ところが、建設業者がやってきて、これらの集落を潰している今、キャロムクラブはいつまで続くのだろうか？ 復活することはあるのだろうか？

このクラブの魅力的で悪名高きキャラクターは消えてなくなるのだろうか？

プレイヤーの誰もがこの疑問に触れようとしない。

今のところ、彼らはゲームに夢中で、全ての視線はクイーンに向けられている。

全ての写真は、ホームグロウン[20]のため、ラシ・アローラ氏によって撮影されています。この記事が気に入って頂けたなら、次の記事も読んでみてください：

※ [訳注:20] ホームグロウン (Homegrown) とは、この記事が掲載されたインド人向けの電子雑誌。

翻訳：石川 久